

呉錦堂を語る会通信

NO.19 Jul. 2015

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2015.7.1



移情閣上棟百周年記念講演 2015年5月9日 於：孫文記念館（移情閣）

「孫文記念館の歴史—建物が語ること そして現在からの問いかけ—」

講師 建築史家 神戸大学名誉教授 足立裕司 先生

みなさんこんにちは。今日、お話しする内容というのは、この移情閣という建物から問いかけをすることです。ちょっと縁遠い方もおられると思いますので、できるだけわかりやすく、お話ししていきたいと思えます。

まず、ここでお話しする内容は、修理のときに建築研究協会の伊藤誠一郎さんという方と、今日も来られています兵庫県公園緑地課の塚原淳さんたちと一緒にやってきた、研究してきた成果です。また、舞子地区の別荘地・住宅地としての発展の研究については、私の研究室の院生であった尾崎光君の尽力があります。今日の話には、これら成果が盛り込まれていますので、関わられた方々を代表してお話したいと思います。

《1. 移情閣の建つ舞子という場所について》

まず、舞子という場所についてお話いたします。

ここは、狭い場所ですけれど、白砂青松で、今という娯楽的な場所だったのかなと思います。この絵図に見られるように、ほとんど全く家が描かれていない状態から今のような状態まで百年で、あっという間に変わってきたわけですね。これは、武藤治太さ



海から見た移情閣と武藤邸

んからお借りした資料ですが、左端に移情閣が写っています。これは、昭和5年8月23日に撮られたもので、地域資料として貴重な写真です。

近代を迎えたこの地区にとって、一番重要なことは、有栖川宮別邸がこの地に建てられたことではないか、ということです。「・・・ではないか」という表現をしたのは、完全にそうだったという実証にまでは到っていないからです。おそらく、間違いはないと思うのですが、この有栖川宮別邸が建てられたことが、その後のこの地区の発展に決定的な影響を及ぼしている、と私は考えています。

この写真は「根上がり松」です。このような立派な老松は、ほとんどなくなってしまいました。今、試行的に「根上がり松」を人為的に作る試みがなさ



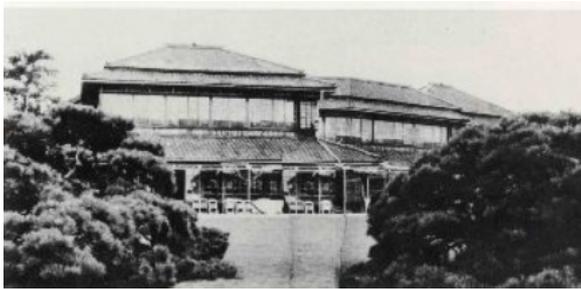
明治期の国道「根上がり松」が見える

れております。マウンドを作って、そこに苗木を植え、根が張ったら、マウンドを取り払えば根上りの松になるのではというのですが、どうも、私は信じられません。根っ子が下までどんどん下りていくというのですが、マウンドを取ったら、バタッと倒れてしまうのではないかという感じがしています。

地域の発展ということでは、隣の須磨は、須磨寺が発展の機縁になっていまして、その後、武庫離宮ができて、離宮道なんかできて、住宅地になっていきます。舞子は、住宅開発が大正期ぐらいからどんどん進むのですが、舞子公園として公園化されていたおかげで、今も昔の面影が残っているんですね。須磨にも須磨浦公園があって、一部昔の面影を留めています。保護しないと環境は変わってしまうという証しでもあります。

これは昔の舞子公園です。明治33年に兵庫県で初めて制定された県立公園なのですけれども、一番重要なのは明治29年の舞子公園駅（1933年、舞子駅に改称）の開業です。明石まで駅がなく、素通りしていたところに公園ができ、なぜ駅ができたのか。おそらく、さっき言いました有栖川宮別邸の関係があるのかなと思います。

移情閣（松海荘）、有栖川宮別邸、武藤邸、もう少し丘の方にある日下部邸、そういった、日本の住宅史の中でも重要な意味を持つ建物が、明治末くらいから、この地区に集中して建てられていくこととなります。



有栖川宮別邸

ところで、人が住むためには何があるでしょうか。一応、文化的生活ということになると、道路、電気、上下水道、これらが整ってくるが見込めなければ、たぶんこの地は選ばれないと思うのです。そのための一つの準備段階が舞子公園駅の開業だったと思います。

この地区は、実は震災前までは、そんなにすごい建築遺産のある地域とは思っていませんでした。今となってみると、日本の住宅史の中で重要な意味を持つ建物がこれだけあるということでは、大事な場所になってきたなあと思います。

明石海峡大橋、大きいですねえ。土木構造物というのは建築をはるかに凌駕するスケールをもっています。土木では、ちょっとした建設であっても、建物にはものすごく大きな影響を与える。その好例だと思います。孫文記念館も動いたし武藤邸も動いたし、みんなぞろ



■ 明石海峡大橋と孫文記念館

ぞろと動いたわけですねえ。移情閣、それから、武藤邸。武藤邸まで動かないといけなかったのでしょうか。

これは舞子ビラです。有栖川宮別邸の何か残っていないかと調べてみたのですが、今残っているのは松林くらいですね。

それから、日下部邸、私自身は重要文化財にしても十分価値のあるトップクラスの建築物だと思っています。イギリスのアー・ヌーボーの影響のある建物です。大変質の高い建築物です。皆さんは藤森照信さん



日下部邸（現・舞子ホテル）

をご存知でしょうか。われわれの研究仲間なのですが、私もそうですが、この建物の設計者が知りたくてしょうがない。この建物の設計者がわかれば重要文化財にしたらいいのではないかと思うのですが。重要文化財になれば、この狭い地区に重要文化財が二つということになりますね。すごいことです。

これは、旧木下家住宅、和風建築です。又野さんという方が建てたもので、戦後すぐに木下さんに譲られたという経緯があります。非常に立派な和風住宅です。立派といってもですね、震災前の芦屋荘や関電の松籟荘など、どちらも芦屋にあったのですが、そういう建物と比べたら、そっちの方が立派かなあというぐらいですから、上の中か中の上くらいの建物です。ただ、非常によく残っていた。普通は、便所とかみんな変えてしまうのに、変えずにちゃんと維持されていた。木下さんという、次を引き受けられた方が非常に丁寧に維持されたということですね。

《 2. 呉錦堂という人について》

（このテーマについては、当『通信』バックナンバーとの重複等の関係で、「錦堂学校及び呉錦堂故居訪問」等は省略し、次の箇所のみ掲載させていただきました。）

呉錦堂は、明治37年、帰化が許されて、舞子の土地を登記しました。ここが問題ですね。要するに、中国の人は土地取得ができなかった。ということからいうと、帰化したことによって、やっと、土地取得ができた。それが明治37年で、明治40年ぐらにはもう松海荘ができています。土地を入手してすぐに家が建った。

それから、舞子の北側にも、もう一軒家があったし、籠池通りには、別に、立派な家を所有されていたということですから、普請道楽な人だったということがわかります。

《3. 移情閣の修理》

修理に当たって何が大変だったかということをお話します。

(1) 難しい立地条件：風

そこがもう海ですから。まだ、直撃した台風はないのですが、直撃すると、恐ろしいことが起こるのではないかと。

(2) 不安定な埋立地と難しい構造補強

地盤の弱い埋立地に、コンクリートブロック造で地震に耐えるものをどうやって作るかということですね。

(3) 難しい工法：コンクリートブロック造

実は私、工事が始まる前までは、コンクリートブロックだとは思っていなかったのです。何で作っているのかな、たぶん石かな、石を貼っているのかなと。こんな色をしていなかったのです。グレーでした。六角堂、六角堂と言って、子どものときから親しんでいた建物ですけれども、コンクリートブロックとは誰も言うてなくて、よく調べたら、ちょっと削ってみたらわかるのですけれども、そういう機会はなかったわけです。コンクリートブロックなのだ。もともと、海岸で風が強く、地盤的にも不安定な埋立地にコンクリートブロックで3階建、非常に大変だなあと。木造が骨組みになっていて、その周囲にコンクリートブロックが積んである。難しい建物でした。

(4) 難しい復原作業

中が随分、変わっていたということがあって、この壁紙もなかったわけです。どこまで復原ができるのだろうか。この“復原”という字、“原”という字を使っていますが、“元”と差をつけようということですね。“原”にはオリジナルに近づけるという意気込みを表現しています。それが難しかったですね。

解体作業は地震前から続けていて、その途中で地震が来たわけです。変な言い方ですが、地震が来たときにこういう解体をしていなかったら、修理のときに、(耐震策を) どうしたらいいかということがわかった

のですが、逆に、こんなにきれいにはパーツが取れなかったで



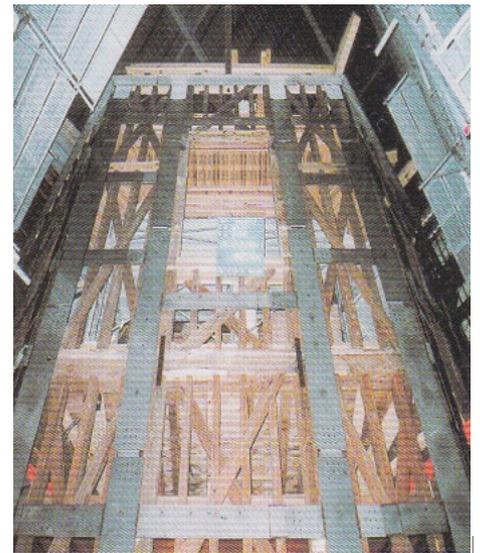
解体したパーツ

しょうね。これらパーツを全部使い切るとというのが復原で、修復の本来の姿です。

ところで、この移情閣のコンクリートブロック造というのは、幸いなことにというか、困ったことにいいますか、無筋でした。ですから、塩の影響をほとんど受けていない。もし、律儀に鉄筋がいっぱい入っていたら、ブロックが割れたりとかして、大変な解体作業になったのだらうと思います。鉄筋が入っていなかったおかげで、これら、全部、生け捕りにできています。

それでは今度も、また、無筋で建てればいいのかというと、そんなわけにいきませんねえ。こういうふうに、皆さん来ているときに、グラッときたときに、潰れてしまったら困るわけです。せめて、逃げる時間、安全でないといけません。

解体前の移情閣は、柱、桁など、木造の在来工法で作っていて、たくさんスジカイなども入っているのですが、グラッときたときに、これではとてももたない。コンクリートブロックが外壁に積んであるわけですが、在来工法で作った木造部分は構造体ですが、こちらは構造体ではないのです。これは、外壁の化粧材です。でも、化粧材だからといって、何も働かないわけでもない、こちらもがんばってもらって、木造部分と両方ががんばることによって、この建物をあまり大きく変化させなくてもいいのではないかと。ということで、修理方針が決まりました。



■耐震策のステンレスのベルト

このように、ステンレスのベルトでジョイントしていく、全部一体になってスクラムを組んでいる状態にしましょうと。帯のようにまわっていますから、丁度、樽のタガだと思っていただけたらいいかと思います。

復原時、いろんな種類があって、厄介だったのはコンクリートブロックです。取替率ってわかりますか。復原の過程で、もともとあったものを取替えないといけない。その割合が18% (取替898個/全体5018個) なのですが、これはすごくいい成績なんです。鉄筋が入っていたら、おそらく、50%を超えていたでしょう。姫路城の平成の大修理が終わりましたが、姫路城よりもこっちの方がよほど難しいですよ。伝統的工法の方がやりやすいと思っています。

移情閣の内部の復原にあたっては、華僑の皆さんにお願いして写真を集めたのですが、これを見ると、壁紙、マントルピース、シャンデリアなどが写っておりますね。復原のとき、こういう資料がないと嘘になります。例えば、一枚の写真が、修理のあと出てきたら、「違うやんか」と言われたら、えらいことです。われわれ修理をしている者には、恥ずかしいことです。資料のあるところは、「資料通りにやりました」、資料のないところは、「これは見込みです」というようなことでやるわけです。

内装の壁紙ですが、これは金唐紙といいます。本来、革を型押しして彩色をして使っていたヨーロッパの技法です。日本では、中国伝来の紙を日本風にずっと維持してきましたが、これを唐紙といいますが、その唐紙をヨーロッパの革のかわりに用いて作ったのが金唐紙です。向こうの壁紙はプリントするだけですから、こういう凸凹はないのです。だから、凸凹している紙に彩色した壁紙というのは、非常にオリジナリティがあるのです。日本人



金唐紙とカーテン（復原後）

は、代用品を作る名人ですね。

この後ろに「金唐紙の作り方」という展示がありますが、非常に手間がかかります。試しにやらせてもらいましたが、すぐに腕が痛くなります。職人さんは一日中、叩いているというのですが、本当かなと思います。私は、5分ともたなかったですね。冗談ですが、ここで用いた金唐紙は千円札を貼るぐらい高価なものだということ、みんなびっくりするのですが、千円札より高いかもしれません。

次は、カーテンの復原についてお話しします。これも、ものすごく苦労しました。白黒写真で写っていても色がわからないのです。私は、十中八九、赤だと思ったのですが、赤でやると大変目立つのです。私は、カーテンについて任されていたので、緑にしようかと提案しました。縦糸と横糸の光り具合とか、いろんな調整を川島織物にやってもらって、非常にいいものになりました。上部、この部分をバランスといいます。この装飾はタッセルといいます。このタッセルですが、手編みの紐でちゃんと作ると、1本で、2万、3万します。

次は家具です。この建物の様式とほぼ似たような形ということで、最初の家具を作ったのですが、その後、映像



移情閣1階展示ケース（復原直後）

機器を使用するには、これではちょっと不便ということで新しく別の家具を作ったのです。私からのお願いなのですが、「このようなことがしたいから家具を変える」、というのではなく、できるだけ今ある家具を生かす使い方を考えてほしいと思うのです。ヨーロッパでは、非常に工夫をしながら、手持ちのものをどううまく使っていくかと考えるのが普通なのです。

《4. 修理からわかってきた移情閣の建設経緯》

呉錦堂は舞子海岸のこの辺りにいっぱい土地を持っていたのです。帰化の後、所有権を移転して、最後は自分の名義にするのですけど。彼は中国人で、日本国籍がなかったときは土地を入手できなかったために、たぶん、名義を借りて先行買っていたのではないかというのが私たちの基本的な考え方です。その後、呉啓藩に移ったりしていますが、随分、宅地を買っているわけです。たぶん、駅ができることを見越して、この地域の土地をずっと所有していったのだろうと思うわけです。悪い言い方ですが、“地上げ”という方が正しいかもしれませんね。三井にしても、神戸で随分、土地を持っているのです。財閥になったところは、けっこう、土地所有、土地ころがしをやっています。また、その当時としては、そんなに異常なことをやっていただけではないのです。



● 旧武藤山治邸

問題は、この武藤邸です。呉錦堂はこの辺の土地を全部持っていた。武藤山治をなぜかここへ呼び寄せるのです。おそらく、土地を安く斡旋したのじゃないかと考えられるのですが、わかりません。

これが、この地域における、呉錦堂さんの土地所有の一覧です。33年、37年、45年、ずうっと登記を繰り返して、最終的に、すごい土地所有者になっています。まさに、“地上げ”です。

こういうことが修理からわかってきたことです。

《5. 移情閣についてのいくつかの疑問》

最後になりますが、移情閣にまつわる疑問点についてお話しします。

一つは階段です。ここに変な階段があります。皆さんの後ろにその上り口があります。こんな変な階段は、建築設計の「いろは」を知っている建築家であればやらない。どう見てもこれはないでしょう、というような階段ですね。これも疑問点



移情閣1階と2階の間の階段

です。その上へ行くと、ぐるぐる折り返して上がる、整然とした階段になります。

この整然とした階段の段数を計算してみると、実は1階まできれいに下りて来ることができる。ただし、下りていく方向は今の階段の反対側、海側に下りてくることになります。つまり、入口の玄関の側に階段を設けたいので、設計を変えたのだなあということが分かってきました。修復の時点では、完成後に改修したのかなと想像していたのですが、材料をよく観察してみると改修の跡がないのです。建設途上で設計変更しているのだと思います。

それからこれ、付属棟の2階ですが、開けると落ちそうになるドアがあったり、どうなっているのだろうと思います。この建物の3階にも、同じようなドアがあって、開けた向こうは何もない、踏み外しそうになりますね。

これが、修復工事中の写真ですが、この辺、ブロックがきれいに積んであるのですが、この辺は、穴埋めのようにしているのです。これは、たぶん、開口部だったところを埋めたのだろうと思うのです。つまり、もともと松海荘の外壁だったものが内部に取り込まれたのです。穴埋めをしてくれたおかげで、こんなふうに変わっていききましたよ、ということを確認することができました。

それから、移情閣の設計者ですが、坂本勝比古先生は横山栄吉といわれているのですが、私が追認の調査をしても、この人の名前は出てこないのです。少し困っ

たな、と思っています。付属棟はコロニアル・スタイルといって、すでに、神戸の街では実績があった形です。後でもう一度触れますが、松海荘は移情閣と同じ仕様、つまり、同じコンクリートブロックを用いて、形なんかも多少似ているということで、同じ設計者ではないかと思うわけです。建築主の呉錦堂の指示にかなり忠実であったように思われます。

ところで、なぜ小さい付属棟の方が残されて、立派な松海荘は潰してしまったのか。移築費のことがあったのかもしれませんが。移情閣だけでは自立できないのは確かです。松海荘は道路で軒切りになるから、海岸の方へ曳き屋しないとだめなのです。本当であれば、松海荘を曳き屋したらいいはずですが。ところが、移情閣と壁を共有していた。だから、無理じゃないかとあきらめたのかもしれませんが。どっちかを犠牲にしないとだめなのですが、この移情閣はお気に入りだったのかもしれませんが。松海荘の方は、あんまり惜しくなかったのでしょうか。

《6. 呉錦堂と東亜セメント》

次はコンクリートブロックの話なのですが、その前に、ちょっと、復原された形を見てください。ほぼ、昭和41年の台風の前に戻されています。それで、もう一度、確認しておきます。この付属棟は木骨レンガ造で、なくなった松海荘は移情閣と同じですね。

それで、われわれのささやかな発見なのですが、移情閣のこの西北の壁に開けられていた開口部は、松海荘と繋がっていたところなのですが、松海荘の取り壊しに伴ってその開口部を埋めた部材から、この皺のある化粧ブロックが見つかった。この化粧コンクリートブロックは、この孫文が写っている下の写真の後ろの扉の化粧ブロック（赤い矢印の箇所）と皺まで同じな

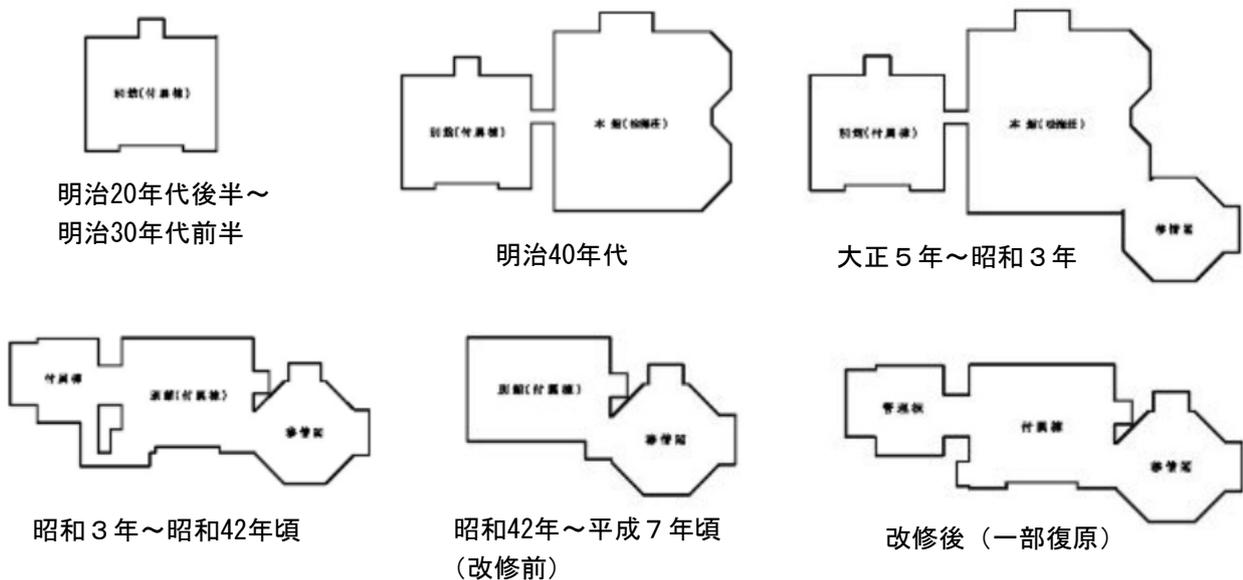


のです。このブロックは、いま、この記念館で展示されています。皺がいつしよ、形取りしているから一緒になるのです。些細なことなのですが、修理をしている者にとっては、大発見なのです。私自身の仮説ですが、移情閣は、東亜セメントの製品の実践の場、つまりモデルルームのような役割を持っていたのではないかと思います。

残る疑問は、隣の付属棟です。これは、レンガ造です。修理してみると、解体した痕跡がないことや資料から、おそらく曳き屋をしたと思われます。昔は曳き屋することは、それほど大した仕事ではなかったのです。そうすると、東から順に移情閣、松海荘、付属棟と並んでいたことになるので、付属棟は木骨煉瓦造という仕様からみて、東亜セメントを設立する前のものだったのだろうということになる。付属棟は、神戸の居留地に残っている十五番館と同じ造り方をしている。同じ様式的な雰囲気を持っている。つまり、木骨煉瓦造は、明治初頭ぐらいでなくなっていった技法ですから、付属棟はかなり古い建物だということになる。いろいろ勘案するとこの付属棟が建てられたのは明治20

年代ぐらいまで遡ってしまいます。この頃には呉錦堂は、まだ中国国籍ですから、自分自身では土地所有ができなかったはずなのですけれども、何らかの形で、そういう建物を造ったか、造った人から譲り受けたのだということになるわけです。呉錦堂が建てたかどうかはわかりませんが。ひょっとすると、舞子公園駅ができたころに、先に造ったのかもしれないという仮説も成り立ちます。ということで言うと、付属棟は一番重要な建物だったのかもしれないということになってくるわけです。先ほど言いましたように、東亜セメントができる20年くらい前に、付属棟ができています。それは、まだ、呉錦堂がセメント業に手を出す前から、レンガで造っても不思議はないと思います。

移情閣は何度かの建設と移築を通じて現在の形になった



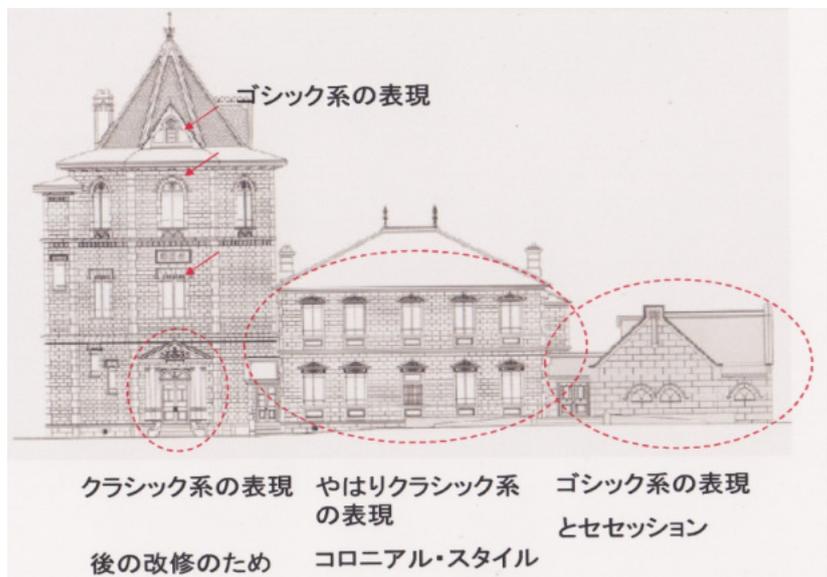
《7. 移情閣の形はどのようにして生まれたか?》

最後は、移情閣の様式についてお話したいと思えます。(移情閣の北面各階、窓の上部を指して) この辺、アーチの尖った部分、フラットな部分、基本的に、この辺にあるのは全部、ゴシック様式です。(一階の玄関上部を指して) ここだけが違うのですね、どうしてでしょうね。

付属棟は、クラシック様式というのですが、ギリシャ、ローマの神殿の、あの三角破風をモチーフに、西洋がずっと使い続けてきた古典的な流れです。日本に伝わった洋風建築として、様式的に一番古いのはコロニアル・スタイルです。植民地様式といって、欧米の列強が新しい地域に出て行ったときに使っていた様式

です。一番オーソドックスなヨーロッパ、アメリカの共通言語というものです。

(次頁に続く)



(下の写真、付属棟南面を指して) こちらの顔つきは、また全然違いますね。ベランダが付いている。ベランダがないと暑いので設けられたものですが、でも、雨が吹き込んだらやっかいだということで、窓ガラスを



付けてしまったのですね。これは異人館の様式です。異人館の様式で、こういう外壁がレンガの異人館というのは、居留地の十五番館くらいです。もちろん、もっと新しい風見鶏の館などは、新しい時期にもう一度同じようにレンガ造でやっていますが、古い時代

の建物としては、十五番館が唯一です。ですから、コロニアル・スタイルというのは、神戸あたりで使われていた様式で、神戸の最初の頃の建築とはどうだったのだろうということを知る上で貴重なものです。移情閣はゴシック様式で、ブロックという新しい材料を使って造った。だから、重要文化財になりましたが、付属棟は、地域史の上では重要です。

次は移情閣の形、八角形についてお話します。八という数は縁起がよいとか、八卦思想とか、中国の人は八という数字、八角という形を盛んに使うのですが、そういうことで移情閣を八角形にしたという人が居ますが、私は、移情閣を中国様式だというには根拠が乏しいと思っています。増築するときに、丁度、八角形がうまくいくということで八角になったのでしょうか、この形はゴシック様式です。「でも、八角という形は中国風ですね」ということにはなるのですが、建築は八角だけでは設計できませんので。では、どうなのでしょうということですね。

調べてみると、19世紀以降にこういう中国趣味とい



うものが盛んに流行った時期があります。左の写真は、イギリスにあるキューガーデンに建っている中国風の建物です。キューガーデンは、今、世界遺産になっていますが、もともと貴族の別荘だったところです。この移情閣の様式は、イ

ギリスとか欧米のそういうところを経由してきた形式ではないかと思っています。それから細部には、19世紀末のその当時の一番新しかったデザインであるセセッションという形式を使っているということです。

いろいろ書物を紐解いて見ると、この写真のような建物がでてくるのですね。

こういうものを総称して、ピクチャレスク、絵に描きたくなるような画趣がある、というのですが、19世紀イギリスでさかんに流行ったものです。おそらく、そういうものが、移情閣の基本設計をした人は頭にあつて、それを使ったのでしょ



それから、もう一つの基本はゴシックです。当時イギリスでは、一番大事なものはゴシック



ゴシック様式の駅舎

だという運動が高まっていて、いろんなところでゴシック様式が用いられるようになります。イギリスの国会議事堂やハリーポッターで有名な駅もそうですね。

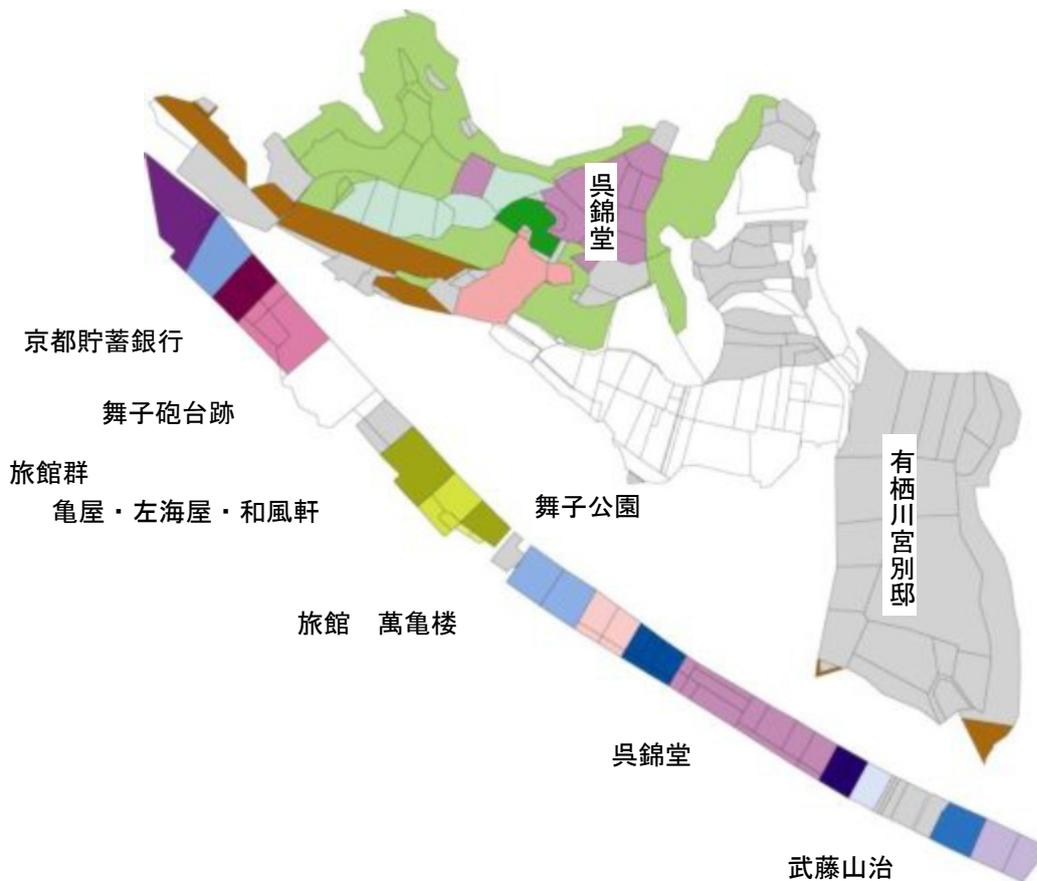
これ(下の写真)は、昨年見てきたものですが、バージェスという建築家が設計したカーディフ城です。日本に、バージェスの弟子がいました。ジョサイア・コ



ンドルという人で、東京駅などの設計をした辰野金吾のお師匠さんです。そのジョサイア・コンドルは、伝統的なゴシック復興運動の推進者でした。

ですから、移情閣の設計者もそういうことを知っていて、ゴシック様式と中国趣味を併せたもので何がいいかと考え、ここに行きつたのではないのでしょうか。

明治45年 舞子浜の宅地区分 (着色なしの部分は村、内務省、兵庫県、所有者不明の土地)



《まとめ》

1. 呉錦堂が舞子に別荘を建てた理由というのは、風光明媚だけでなく、有栖川宮別邸の建築と駅の開業による土地の高騰を見込んでいたのではないかと推測される。
2. 武藤山治との関係でいうと、面白いのは、仕手戦で武藤山治が会社を辞めていた時期に武藤邸が建てられたということです。仕手戦だけはやめろ、と武藤山治が口をすっぱくして言っていたのに、やってしまったのは呉錦堂です。そういう意味では、その代償とはいっていいませんが、関係があるのかなと思ったりしてしまいます。これはエピソードです。
3. コンクリートブロックを使用したということは非常に重要な意味を持っています。最終的には、日本のセメント業というのは、全部、小野田セメント、浅野セメントみたいなところに吸収されていってしまう。ちょうど、銀行とよく似ていますね。巨大化していかないと採算が合わないのかもしれないかもしれません。最終的に、東亜セメントも吸収されていきますが、呉錦堂はその起業家として大きな役割を担った。
4. 八角の意味は中国の伝統という意味があるけれども、西洋の異国趣味を受けて、この設計者が考えたのだろう。ただし、この設計案に、横から口出しをした

人がいた。呉錦堂です。呉伯瑄さんが言っていることですが、呉錦堂は非常に現場が好きだったみたいです。こう下りていって、海岸に出るだけではだめで、玄関を作りたかったのだろうということですね。

5. なぜ、付属棟が残ったかということですが、呉錦堂が来日して最初に造った建物かもしれないということ、何か思いがあったのかもしれないかもしれません。ただ単に、松海荘がひっついていてから離せなかったのかもしれないかもしれません。松海荘が大きすぎたということがあるのかもしれないかもしれません。ひょっとすると、付属棟は自分自身のルーツとして残したかったとか、深い意味があるのかもしれないかもしれません。

6. 最後に残った疑問点は、横山栄吉とは誰かということですが、残念ですが詳しいことは分かりません。これからもっと調査をしないといけない人だと私自身は思っております。

どうもありがとうございました。

以上、文責は編集委員橘雄三です。

なお、使用画像は足立裕司先生提供です。ただ、名称に■を付した2点は孫文記念館所蔵、●を付した1点は県立舞子公園所蔵です。